

原 著

## 学校期における特別活動の学習効果に対する短期大学生の捉え

宮崎 大樹<sup>1\*</sup>

**要約：**本研究は、短期大学生を対象としたアンケートの結果から、学校期における特別活動の学習効果に対する捉えについて明らかにしようとしたものである。分析の結果、学校期における特別活動の経験は多くの学生たちにとって満足感や達成感、感動などを得ることのできるものであったことがわかった。学生たちは、高校期に至ってもそういった特別活動による体験に対して価値を感じており、「やり遂げる経験」や「感動し合う体験」、それらを通して得ることのできる「満ち溢れた達成感」を求めていることが明らかになった。さらに、良好な人間関係の中での心地良い関わりの中に限ってそのような体験をすることを求めているわけではなく、異なる考えを持つ人や集団と意見をぶつけ合い、試行錯誤する経験にも価値を見いだしていることがわかった。

**キーワード：**特別活動, 学習効果, テキスト分析

### 1. はじめに

2020年度、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の感染拡大は、全国一斉休校措置に始まり、小・中・高等学校を中心とした学校教育に多大な影響を与えた。断続的な休校や授業時間の短縮は子どもたちの日常を大きく変化させるとともに、学校における教育活動のあり方についても変化を余儀なくされた。オンライン化や休業期間の短縮などによって、国語や算数など、いわゆる教科における教育内容の多くが十分ではないにしても補われたのに対して、学校行事の多くは中止せざるを得ない状況となった。授業時間数を確保するためには、準備も含めて行事に時間を割くことができないうのは致し方がないと言えよう。また、行事の多くが集団での行動を前提とするものであり、感染症予防の観点から安心・安全な状況での実施

が困難であったことも原因と考えられる。このように多くの学校行事が中止される状況に対して、文部科学省はホームページなどを通じて、適切な感染防止策を十分に講じた上での行事の実施をお願いしてきた。例えば、文部科学省のホームページでは次のように示されている。「修学旅行の実施については各学校や学校設置者において判断していただくものですが、文部科学省としては、修学旅行は学習指導要領に定める特別活動の中の学校行事に位置づけられ、子供たちにとってかけがえのない貴重な思い出となる有意義な教育活動であるため、その教育的意義や児童生徒の心情等を考慮し、適切な感染防止策を十分講じた上で、その実施について特段の配慮をお願いしたいと考えています。特に、令和2年度に実施予定であったものの実施できなかった学校においては、改めて

<sup>1</sup>高知学園短期大学 幼児保育学科 \*Email: dmiyazaki@kochi-gu.ac.jp

実施に向けた御検討をお願いしたいと考えています。」ここでは、学校行事は、子どもたちにとってかけがえのない貴重な思い出となる教育活動であり、且つ学習指導要領に定める特別活動の中に位置付けられていると述べている。

特別活動（小学校）における目標は、学習指導要領第6章の第1に、次のとおり示されている。

集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。

- (1) 多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けるようにする。
- (2) 集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようにする。
- (3) 自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、集団や社会における生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、自己の生き方についての考えを深め自己実現を図ろうとする態度を養う。

引用部分の(1)に示される「人間関係形成」、(2)に示される「社会参画」、(3)に示される「自己実現」の3つの視点は、平成29年に告示された新しい学習指導要領等に向けた審議のまとめにおいても、特別活動における「見方・考え方」として示されている(文部科学省, 2016)。これら特別活動における目標や見方・考え方が示された背景には、現代社会における様々な状況がある。久永ら(2017)は、核家族化や少子化に伴う家庭教育力の低下により、人間関係を学ぶチャンスが奪われ、親の過保護や過干渉がさらに拍車をかけると指摘している。また、加藤(2009)は、家庭

環境の変化により、人間関係力の衰退・倫理観の欠如・社会性の未発達・自主自立精神の発達の遅れ・他者への配慮心の欠如・基本的生活習慣の未形成等を指摘し、その上で学校教育の役割として特別活動の重要性を訴えた。このように、学校における集団活動を通じた学びの中心とも言える特別活動は、将来、社会に出て活躍することになる子どもたちにとって、非常に大きな意味を持つ教育活動の一つだと言える。新型コロナウイルスの感染拡大により、特別活動の内容の一つである学校行事の中止が社会的に取り上げられ注目されたが、学習指導要領に「各活動・学校行事」として示されている学級活動、児童会活動、クラブ活動も学校行事同様に、感染状況に応じて中止等の措置が取られた。そもそも、新型コロナウイルスの感染拡大による影響を受ける以前から、学校教育現場では道徳の時間と総合的な学習の時間の時間についてはその評価方法や評価基準にまで研究開発が進んでいる一方で、その他の特別活動の領域については逆に削減・軽視されはじめている(久永ら, 2017)ことが指摘されていた。

このような学校行事の縮小・中止は子どもたちにどのような影響を与えたのか。日本財団・三菱UFJリサーチ&コンサルティング調査(2021)によると、「小学生は学校行事が中止・縮小された場合の非認知能力・生活習慣等への悪影響が大きい。特に運動会・体育祭・球技大会や修学旅行・移動教室が中止・縮小になった場合、悪影響が大きい」「中高生については、学校行事が中止になった場合の非認知能力・生活習慣等に対する悪影響は小さい。ただし、中高生の学芸会・文化祭や、高校生の修学旅行・移動教室は非認知能力・生活習慣等への悪影響が大きい」(P.12)ことが明らかにされた。つまり、年齢によって多少の大小はあったとしても、学校行事の縮小・中止は子どもたちの学びに悪影響があることが示された。長引く新型コロナウイルス感染拡大の状況にあって、今後、少なくとも数年は以前と同じような学校行事を含む特別活動の実施は困難であることが予想される。今後、学校は行事の精選や重点的な実施など、

新しい生活様式の社会における特別活動のあり方について検討する必要がある。しかし、特別活動において育もうとする力は、「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の三つの視点に示されるように、点数などで示すことのできない、いわゆる非認知的能力である。そのため、特別活動における活動内容の精選や重点的な実施をするための判断基準を示すことは非常に困難である。一方で、田口(2018)は、「特別活動の特徴は、教科書がないこと。また、目的を達成するための手段や方法は各学校に任されていること。そして各学校が置かれている環境の中で、何をすべきかをそれぞれが考え、実施できることは大きな魅力であり、工夫のしがいもある」(P.57)と特別活動の特徴とともに大きな魅力があると述べている。各学校による工夫した取り組みが求められる特別活動は、自由度が大きい反面、その学習効果が見えづらいという問題を抱えている。今後は、各学校が、倉持(2020)のように特別活動の評価基準を明確に定める取り組みをしていくことが、今後、より強く望まれる。そして、そのためにはまず、特別活動の持つ意義について、より丁寧に、より明確にしていく必要がある。

そこで、本研究では、すでに小学校から高等学校までの期間に特別活動に取り組んできた経験のある短期大学生を対象に調査を実施し、学校期における特別活動のどのような経験に価値を感じ、どのような力を身に付けることができたかと捉えているのかを明らかにしようとした。

## 2. 研究の概要

### 2.1. 研究の目的

本研究の目的は、学校期における特別活動の学習効果に対する短期大学生の捉えについて明らかにすることである。

### 2.2. 研究の対象

A短期大学幼児保育学科の学生156名(1年生78名, 2年生78名)を対象としてアンケート調査を行った。調査は、2021年5月に実施した。アン

ケートは全7項目あり、4件法(Q1~Q4)及び自由記述(Q5~Q7)によって回答を求めた。

### 2.3. 研究の方法

倫理的配慮としてアンケート調査用紙に調査の目的と使用範囲について記載するとともに、口頭でも説明し、授業前の時間を利用して調査を実施した。回答は無記名で行われた。なお、本研究は令和3年度高知学園短期大学研究倫理審査委員会において、研究目的と計画およびインフォームド・コンセントの手続きなどに関する審査を受け、その承認を得て実施された(承認番号第1号)。

### 2.4. 調査の内容

アンケートは、学習指導要領に示された特別活動における三つの視点「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」を基に独自に作成した(表1)。

表1 アンケートの質問項目

- |  |
|--|
| <p>Q1 小～高等学校の特別活動を通して、「多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けることができた」と思いますか。</p> <p>Q2 小～高等学校の特別活動を通して、「集団や自己の生活、人間関係の課題を見だし、解決するために話し合い、合意形成を図ったり、意思決定したりすることができるようになった」と思いますか。</p> <p>Q3 小～高等学校の特別活動を通して、「自主的、実践的な集団活動を通して身に付けたことを生かして、主体的に集団や社会に参画し、生活及び人間関係をよりよく形成するとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を深め、自己実現を図ろうとする態度が養われた」と思いますか。</p> <p>Q4 小～高等学校の特別活動を通して身に付けた力は、今のあなたの生活に生かされていますか。</p> <p>Q5 Q4でそう答えた理由は何ですか。</p> <p>Q6 小～高等学校の特別活動のうち、あなたにとって最も印象深い活動はどのようなものですか。</p> <p>Q7 Q6で答えた活動が印象深い理由は何ですか。</p> |
|--|

### 3. 結果

アンケート調査を実施した結果、137名から回答を得た（回収率87.8%）。

学校期における特別活動の学習効果に関する質問（Q1～4）に対しては、概ね高い評価であった。4（とても思う）・3（やや思う）の肯定的評価をした割合は、「人間関係形成」に関する質問（Q1）に対して97.1%、「社会参画」に関する質問（Q2）に対して94.9%、「自己実現」に関する質問（Q3）に対しては91.2%であった（図1）。また、学校期の特別活動によって身につけた力が今に生かされているかどうかを尋ねた質問（Q4）に対しても同様に94.9%の肯定的評価があった。

次に、自由記述で回答を求めたQ5～7については、テキスト分析ツールKH Coderを用いて分析した。学校期の特別活動によって身につけた力が今に生かされていると考えた理由についての質問（Q5）の回答に対しては、頻出語と一緒に使われることが多い「共起語」を機械的にリストアップして、自由記述の中で出現パターンの似通った語を線で結んだ図（共起ネットワーク）を描いた（図2）。強い共起関係ほど太い線で描画され、出現数の多い語ほど大きな円で描画されている。単語の最小出現回数は5、描画する共起関係の絞り込みは上位60とした。その結果から、4つのグループに分け、整理した。1つめのグループは、集団での活動を通して学んだことや経験したことに関する記述が多かったため、「集団活動」とした。2つめのグループは、自分自身の成長や学びの自覚に関する記述が多かったため、「成長の自覚」とした。3つめのグループは、自分以外の人と話したり協力したりしたことについての記述が多かっ

たため、「他者との関わり」とした。4つめのグループは、自分以外の人と話したり協力したりしたことについての記述が多かった点では3つめの「他者との関わり」グループと共通していたが、そういった経験によって身に付けた力についての記述が多かった点で違いが見られた。よって、「コミュニケーション力」とした。

学校期における特別活動のうち、印象深い活動について尋ねた質問（Q6）について、回答に多く用いられた頻出語を表2に示す。「体育祭・運動会」が最も多く、次いで「文化祭」であった。3番目に多く用いられた「活動」については、委員会活動や生徒会活動、ボランティア活動などの表現で用いられた。また、学校種を示す語の中では「高校」が最も多く22回、「中学校・中学」は11回、「小学校」は7回出現した。

印象深い活動をあげた理由について尋ねた質問（Q7）の回答について、Q5同様に共起ネットワークを作成した（図3）。単語の最小出現回数は4、描画する共起関係の絞り込みは上位60とした。その結果から、4つのグループに分け、整理した。1つめのグループは、クラスや友人と協力したことに関する記述が多かったため、「協力した経験」とした。2つめのグループは、普段の関わりとは異なる人たち、例えば他学年の児童・生徒や、地域の方との関わりについての記述が多かったため、「普段とは違う人たちとの関わり」とした。3つめのグループは、自分の意見を伝えたり、自分とは違う意見とのぶつかりであったり、他者の意見を聞く経験などについての経験に関する記述が多かったため、「意見の伝え合い・ぶつかり合い」とした。

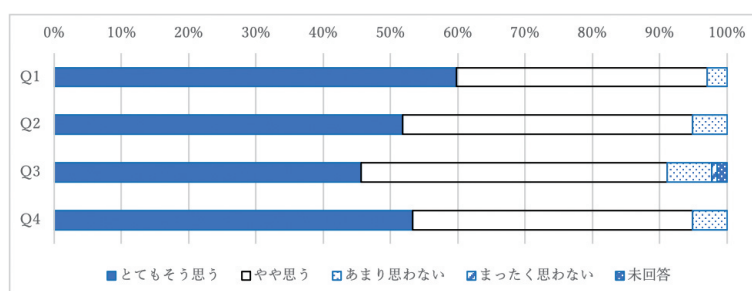


図1 学校期における特別活動の学習効果に関する評価



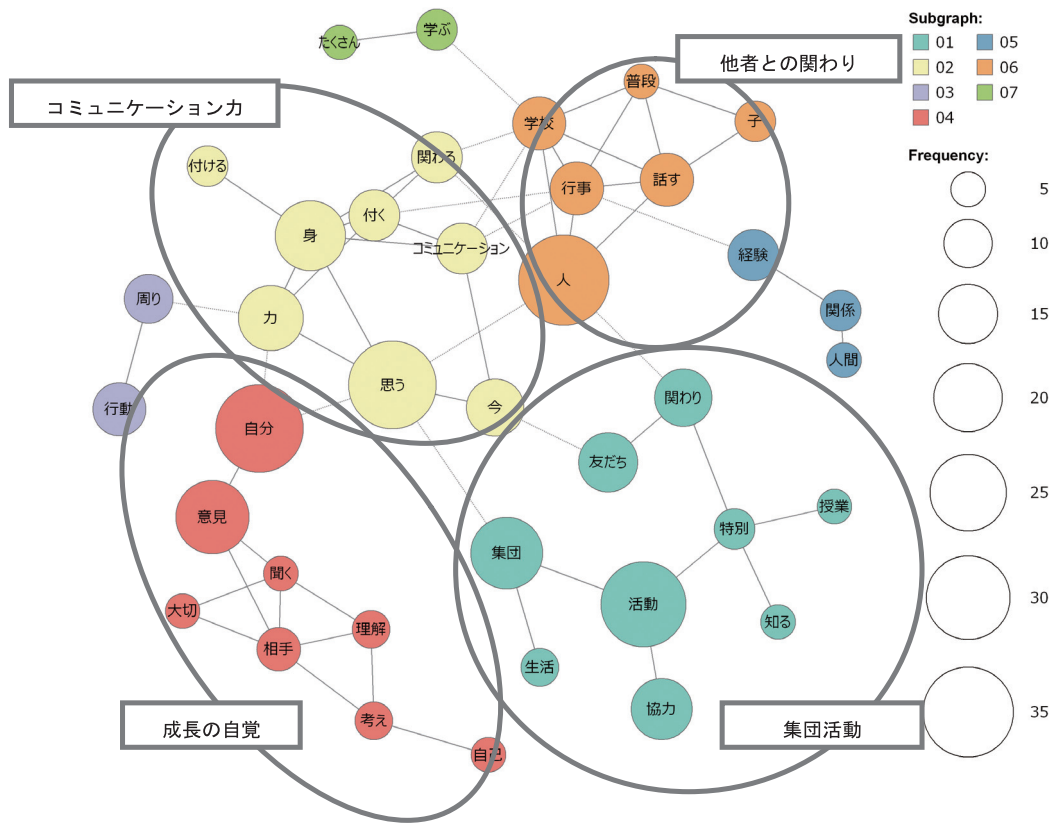


図2 身につけた力が今にいかされていると考えた理由（共起ネットワーク）

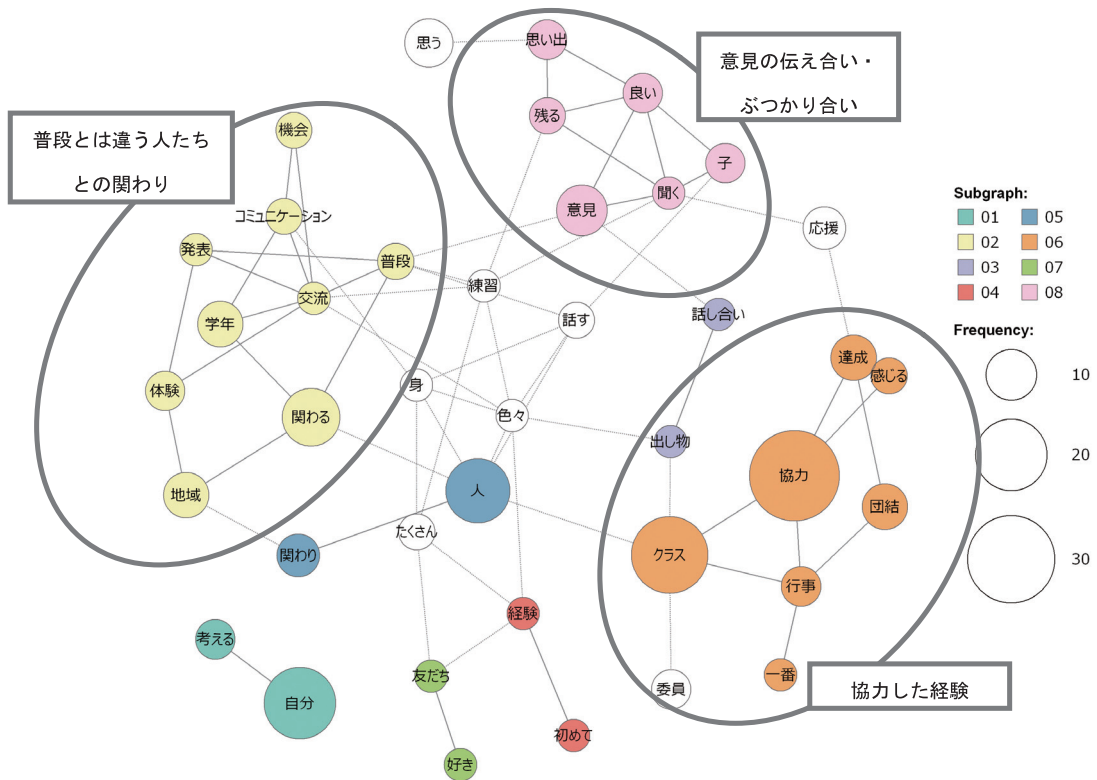


図3 印象深い活動選択の理由（共起ネットワーク）

表2 印象深い活動（Q6）への回答の頻出語

抽出語	出現回数
体育祭・運動会	53
文化祭	40
活動	27
高校	22
学校行事・行事	17
生徒会	12
中学校・中学	11
委員	8
小学校	7
クラブ	7
学級	5

#### 4. 考察

本研究では、短期大学生を対象としたアンケートの結果から、学校期における特別活動の学習効果に対する捉えについて明らかにしようとした。「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の三つの視点で、学校期における特別活動の経験を通して力を身に付けることができたかどうか質問したが、3つとも視点において90%以上の肯定的評価が見られた。この結果から、ほとんどの学生が学校期における特別活動の学習効果を肯定的に捉えていることがわかった。同様に、94.9%とほとんどの学生が肯定的な評価をしていることから、特別活動で身に付けた力が今の自分の生活に生かされていると感じていることも明らかになった。これらの結果は、本研究の対象となった学生たちにとって、学校期における特別活動は満足感や達成感、感動などを得ることのできるものであったことを示唆していると言える。一方で質問項目の適切さについては改善すべき点もあった。本調査における質問項目は、学習指導要領の文言に基づき筆者が作成したものであるが、一つの質問項目が長くなり、学生の理解が困難であったとも考えられる。例えばQ1は、『小～高等学校の特別活動を通して、「多様な他者と協働する様々な集団活動の意義や活動を行う上で必要となることについて理解し、行動の仕方を身に付けることができた」と思いますか。』とした。この質問に「とても思う」と回答したとしても、それが質問項目前半部分の「～必要となることについて理解した」と

いう部分に対して「とても思う」と回答したのか、後半部分の「行動の仕方を身に付けることができた」という部分に対して「とても思う」と回答したのか、または両方に対して「とても思う」と回答したのかが不明確になるという問題がある。今後の調査においては質問項目を見直し、簡潔で明確な項目に改善することが必要だと考えられる。

次に、学校期の特別活動によって身につけた力が今に生かされていると考えた理由について、テキスト分析によって明らかにしようとした。頻出語と一緒に使われることが多い「共起語」を機械的にリストアップして、自由記述の中で出現パターンの似通った語をグループに分けて整理した。その結果、「集団活動」「成長の自覚」「他者との関わり」「コミュニケーション力」の4つに整理された。出身学校がそれぞれの学生によって異なるため、記述された内容はそれぞれ異なるものであったが、共通していたのは「普段の授業では経験できないようなこと」を経験し、その経験から「普段の授業では身に付けることのできない力」を身に付けた自覚が多く記述されていたということである。これは、特別活動のもつ特性上の当然のようにも思える。しかし、各教科等にもそれぞれに「他の教科では経験できないような学び」の特性があり、「他の教科では身に付けることのできない力」を身に付けることができると考えられているために、その教科等が存在しているのである。学生による記述にしばしば見られた、「座学とはちがって」という表現から推察されるように、学生は体験的な学びに価値を見いだしている可能性が高い。アクティブ・ラーニングの導入により、多くの教科等で体験的な学びが取り入れられているが、例えば教室外・学校外での活動には、より特別な学びを感じ取っているようだ。そして、そういった特別な活動を通して得た特別な力、例えばここではコミュニケーション力は、小～高等学校の期間を終えた後にも生かされていると感じていることがわかる。

学校期における特別活動のうち、印象深い活動については、「体育祭・運動会」「文化祭」「活動（委

員会活動や生徒会活動、ボランティア活動など)が多くあげられた。これらの活動が多くあげられた原因としては、「合唱コンクールや運動会などでは、みんなでやり遂げた活動の事実を喜び合い、感動し合うことを通じて、満ち溢れた達成感を得ることができる」(作田・黒崎, 2011) 行事であることが考えられる。みんなでやり遂げる経験や感動し合う体験、満ち溢れた達成感などは、確かに他の教科等では得難いものとも言える。学校においてこのような経験を意図的にさせようとするのは、大人による感動体験の押しつけや道徳的価値の刷り込みと言った批判を受けることもある。しかし、本研究の結果より、学生たちは学校期の特別活動に「やり遂げる経験」や「感動し合う体験」、それらを通して得ることのできる「満ち溢れた達成感」を求めていることが明らかにされた。これらの印象に残った活動を体験した時期は、記述中の出現回数より、「高校」「中学校」「小学校」の順であったことが推察される。しかし、アンケート調査に回答した短期大学生の年齢に近い順に出現回数も並んでいることから、単に記憶の新しいものからあげられた可能性も高い。よって、本研究の結果のみによって各学校期の特別活動の価値に順をつけるなどということは到底できないと考えられる。しかし、逆に考えると、年齢の上がるほどペーパーテスト等による成績評価の占める心理的割合が高くなると考えられるわが国の学校教育システムにおいても、特別活動は必要とされていることが分かる。「勉強が忙しくて行事なんてやっている暇はない」と考えていた学生は多くなく、高校期においても特別活動による体験に価値を感じていることが、この結果からは示唆された。

印象深い活動をあげた理由については、「協力した経験」「普段とは違う人たちとの関わり」「意見の伝え合い・ぶつかり合い」の3つに整理された。この結果から、特別活動における経験の中で、特に人と関わった経験が強く印象に残っていることがわかった。中でも「意見のぶつかり合い」が含まれたことは興味深い。良好な人間関係の中で

の心地良い関わりのみを求めているわけではなく、異なる考えを持つ人や集団と意見をぶつけ合い、試行錯誤する経験に価値を見いだしていることが、この結果からわかった。

以上のように、本研究では、短期大学生を対象としたアンケートの結果から、学校期における特別活動の学習効果に対する捉えについて明らかにしようとした。分析の結果、学校期における特別活動の経験は多くの学生たちにとって満足感や達成感、感動などを得ることのできるものであったことがわかった。学生たちは、高校期に至ってもそういった特別活動による体験に対して価値を感じており、「やり遂げる経験」や「感動し合う体験」、それらを通して得ることのできる「満ち溢れた達成感」を求めていることが明らかになった。さらに、良好な人間関係の中での心地良い関わりの中に限ってそのような体験をすることを求めているわけではなく、異なる考えを持つ人や集団と意見をぶつけ合い、試行錯誤する経験にも価値を見いだしていることがわかった。本研究では特別活動という大きな枠組みに対して、すでに小～高等学校までの学校期を過ごし終えた短期大学生がイメージとしてふり返って評価をしたにすぎない。また、調査の対象が幼児保育学科の学生であり、多くの学生が教育・保育者を目指しており、大半が女子学生という条件のもとに行われた調査であったため、偏った結果になっている可能性は否定できない。今後は調査の対象を広げ、偏りのないより多くのデータを収集する必要がある。その上で、詳細にデータを分析し、特別活動の持つ意義やその効果を明らかにする研究への発展につなげていきたい。

## 引用文献

- 加澤恒雄、『教育人間学的視座から見た「特別活動と人間形成」の研究－新しい教育学研究への試み－』, 2009, 大学教育出版
- 倉持博, 特別活動の評価基準, 2020, 東洋大学教職センター紀要 (2), 39-45
- 公益財団法人日本財団三菱UFJリサーチ&コンサ

ルディング株式会社, コロナ禍が教育格差にも  
たらず影響調査－調査レポート－, 2021  
作田澄泰・黒崎東洋郎, 特別活動との関連づけに  
よる道徳的実践力の研究, 2011, 岡山大学教師  
教育開発センター紀要 (1), 29-36  
田口裕, 次期学習指導要領に対応するための特別  
活動, 2018, 広島工業大学紀要教育編 (17), 51-  
58  
久永哲雄・崔玉芬・高瀬博・竹澤稔裕・久保田友  
樹, 学内キャンプ実習のカリキュラム開発と効  
果について－大学生を対象にした特別活動の試  
み－, 2017, 関東学園大学紀要 (25), 15-28  
文部科学省, 『小学校学習指導要領 (平成29年告

示)』, 2016, 東洋館出版社  
文部科学省, “Q&A (学校設置者・学校関係者の  
皆様へ) 学校行事に関する事”, 文部科学省,  
[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/coronavirus/  
mext\\_00040.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00040.html) (参照2021-09-30)  
文部科学省中央教育審議会, “次期学習指導要領  
等に向けたこれまでの審議のまとめ(第2部)(特  
別活動, 総合的な学習の時間)”文部科学省,  
[https://www.mext.go.jp/content/1377021\\_1\\_7.  
pdf](https://www.mext.go.jp/content/1377021_1_7.pdf) (参照2021-09-30)

受付日: 令和3年10月6日

受理日: 令和4年1月26日



---

**Original Paper**

**Junior college students' perceptions of the learning effects from special activities during the school year**

Daiki MIYAZAKI<sup>1\*</sup>

**Abstract:** This study attempted to clarify the perceptions of the learning effects from special activities during the school year by using a questionnaire survey with short-term university students as participants. The results showed that many students found the experience of special activities during the school years to be satisfying, fulfilling, and inspiring. Even in high school, students felt the value of these experiences and sought “accomplishment” and “being moved by each other”, as well as the "full sense of accomplishment" that could be obtained through these experiences. Furthermore, they did not seek such experiences only in the context of comfortable relationships; they also found value in the experience of trial and error and of confronting opinions with people and groups with different ideas.

**Key Words:** special activities, learning effectiveness, text analysis

---

<sup>1</sup> Kochi Gakuen College, Department of Early Childhood Education and Care, \*Email: dmiyazaki@kochi-gu.ac.jp

